様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　22 年　2 月　28 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2008
課題番号：18520530
研究課題名（和文）　熊野灘沿岸地域を中心とした中世・近世葬送墓制の研究

研究課題名（英文）　The study of medeabl and early modern times burial system at the coastal area of Kumanonada

研究代表者
佐藤　亜聖（SATOU ASEI）
（財）元興寺文化財研究所・主任研究員
研究者番号:40321947

研究成果の概要：
本研究は、中世から近世にかけて、葬送墓制がどのように変化したか、またその背景にある社会の変化を探るべく、考古学・民俗学・文献史学の 3 者の立場から共同研究を行った。その結果、17 世紀初頭に中世的な墓制が転換、17 世紀後半には寺檀制度の成立と村落社会の成熟を背景として近世的な葬送墓制が成立すること、また、これが 1870 年代を境として現在に続くものへと変化することが判明した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	600,000	0	600,000
2007 年度	500,000	150,000	650,000
2008 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総　計	2,300,000	510,000	2,810,000

研究分野：史学
科研費の分科・細目：日本史　近世史
キーワード：中近世墓地　葬送墓制　両墓制　村落　墓標　民俗学　考古学　文献史学

１．研究開始当初の背景

研究代表者を中心としたグループは、以前三重県志摩市において近世墓地の発掘調査および民俗・文書調査を行った。その結果、当該地域の近世墓地成立過程が、地域社会の成り立ちと重要な関係を持ち、またその時期が 17 世紀後半～18 世紀前半にあることを明らかにした。さらに、当該期は現行葬送墓制の成立期に当たることも明らかとなり、漁村部における葬送墓制研究に重要な視座を提供した。しかし、調査地域が狭小なうえに、当該地域は両墓制と単墓制が交錯する複雑な葬送墓制地域であり、両墓制地域での調査研究が重要課題となったため、今回の研究を申請するに至った。

２．研究の目的

研究の目的は、①両墓制成立過程の解明、②現行民俗形成過程の解明、③葬送墓制と村落社会の関係解明、④中近世移行期の葬送墓制解明、である。

３．研究の方法

研究は当初熊野灘沿岸各所の墓地悉皆調査を計画したが、予想以上に墓地調査が難航したため三重県鳥羽市相差町をメインフィ

ールドに設定した。その上で、①主に考古学的手法を用いた墓標研究、②文献史学の手法を用いた文書研究、③民俗学的手法を用いた現行葬送墓制の研究、を柱とし、これに美術史学や地理学的視点を加えて調査を行った。

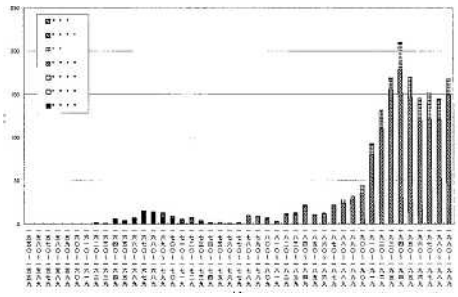
さらに、成果の集約においては、まず各分野において、それぞれの方法論を用いて一定の答えを導き出し、次に互いの学問的立場から研究目的とした4つのテーマについて討論を繰り返し、最終的に意見をまとめて総括とした。

４．研究成果

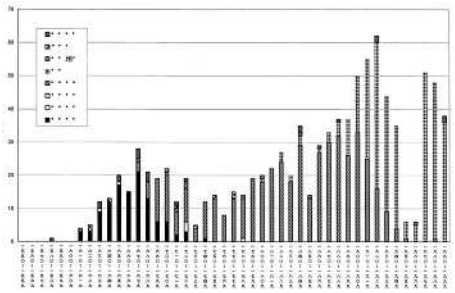
（1）墓標調査

相差町の埋め墓である相差墓地の墓標2979基、詣墓である梵潮寺墓地の墓標1180基を対象として悉皆調査を行った。

相差墓地



相差墓地墓標変遷



梵潮寺墓地墓標変遷

これら墓標悉皆調査の結果、まず近世的墓標の出現期は1610年代にあり、17世紀前半には近世の一般的戒名（信士・信女、禅定門・禅定尼、居士・大姉）が揃う。そして18世紀半ばにはこれら戒名の組成が一定のレベルで落ち着き、また家族の墓が定着する。その後1870年代には院号が導入され、方柱状墓標が出現する。1910年代からは墓標数が急激に増加するが、1950年代には激減、1970年代には再び爆発的増加が起こることが確認された。

（2）文書調査

文書調査ではこれまで知られていた複数の中近世文書の他に、近世・近代文書が複数発見された。

遺された文書の分析からは、当地の中世には相差氏という在地領主が存在しており、さらに領主以外にも侍層が存在していたことが確認できる。

近世になると詣墓のある梵潮寺が地域の中心である金剛証寺と本末関係を結び、さらに17世紀後半におけるその復興には村人の多くがかかわりを持つようになっている。また、17世紀末には中心的神社である神明社の祭礼への参加者が著しく増大している。このように、17世紀半ばの寺檀制度成立を契機とした寺院体制の整備と、村落社会の安定化が17世紀半ば～末にかけて急速に起こることが判明した。

このほか、幕末期に寺院復興のピークがあることが明らかになったほか、弘化4年（1847）年の梵潮寺僧巨陵和尚の葬送次第を知る史料も存在し、葬送墓制の変化を知ることができる。

（3）民俗調査

聞き取りほかから、1960年代まで当地において行われていた葬儀から追善供養までの葬送墓制をほぼ復元することができた。詳細は割愛するが、概ね当地の葬送墓制が、血縁関係を大切にしていること、埋め墓を詣墓同様丁寧に供養していることなどがあげられ、当地の地域的特質を抽出することができた。また、大念仏などの行事には、当地に広く展開する臨済禅展開以前に、浄土・真言系念仏信仰が広がっていた可能性も垣間見える。

大念仏風景

（4）研究の成果

①中近世移行期の墓制

中世の墓制は不明な点が多いが、埋め墓に多くの中世五輪塔があること、蔵骨器と考えられる土器の採取が見られることから、領主および村落上位階層の火葬墓を主体とする墓地であった可能性が高い。こうした中世墓地はほかにも大字単位で存在していた可能性がある。

②近世葬送墓制の諸段階

17 世紀前半を近世成立期と位置づけられ、この段階の近世的墓標が出現する。しかし、この段階では墓標法量に格差が大きく、いまだ中世的身分関係を残していた可能性が高い。

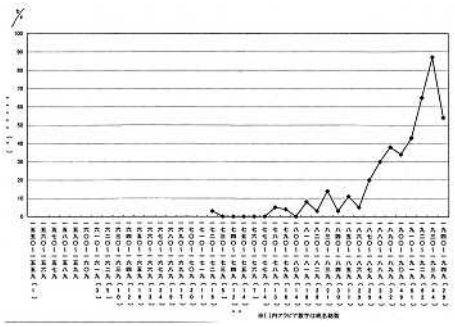
17 世紀後半は近世社会の確立期である。この段階には墓標数の増加、現行民俗に見られる戒名階層性の確立があったと考えられるが、その背景には寺檀制度の確立と村落社会の安定化、均質化が存在したと考えられる。

こうした関係に変化が生じるのが 1870 年代であり、それは墓標の壮麗化、院号の増加などに顕著である。これは、幕藩体制化で規制されていた民衆の墓制壮麗化が開放されたことが背景にあると考えられる。

その後、1970 年代には墓標の爆発的増加、先祖代々墓の盛行が起こるが、これは 1970 年代から盛んになったリゾート開発の成功が背後にあると考えられる。

③両墓制について

当地は埋め墓、詣墓双方に石造墓標を置くという、稀有な形態の両墓制地域である。双方の墓の銘文を付き合わせることで、両墓制成立の時期を特定できると考え、今回の調査を行った。結果的に双方共に 17 世紀前半から石造墓標が存在するにもかかわらず、双方に石造墓標を置く人物の出現は 1726 年であるという意外な結果を得た。墓標総数に占める双方に同一戒名を見出せる墓標の比率をグラフにすると、墓地規制が解除される明治までは常に一定の比率で双方に墓標を持つものが存在しており、当地における墓制は本来、埋め墓もしくは詣墓どちらかに石造墓標を置き、残り一方は墓標なしもしくは木造墓標など簡易な施設であった可能性が高い。そしてその淵源は近世成立期までは確実に遡れ、あるいは中世にまで遡上する可能性も否定できない。



埋め墓・詣墓双方に墓標を持つ墓の比率推移

（5）当研究の位置付けと今後の展望

当研究では、一地域の事例とはいえ、地域社会と葬送墓制の関係を時系列にしたがってきわめて明確にトレースできた。こうしたモデルは全国的に敷衍できるものと考えられ、中近世葬送墓制研究に与える影響は多大である。また、両墓制の問題についても、埋め墓、詣墓双方に墓標を置く特殊形態から、極めて興味深いデータが引き出せた。

今後の課題としては、性格の異なる多様な葬送墓制がモザイク上に展開する当地域の特質を、墓地間の比較から抽出することで、墓地形成過程の多様なモデルを描き出せるのではないかと予想される。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１　件）

佐藤亜聖 2008「惣墓形成の一形態」『王権と武器と信仰』pp1046-1056　同成社　査読なし

〔学会発表〕（計　2　件）

佐藤亜聖・坂本亮太・蘇理剛志「平成 18 年度の調査について」『報告会　相差地域の墓制と文化』2007.3.9　鳥羽磯辺漁協相差支所女性活動センター

藤澤典彦「中世～近世の墓制」『報告会　相差地域の墓制と文化』2007.3.9　鳥羽磯辺漁協相差支所女性活動センター

〔図書〕（計　０　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　０　件）

○取得状況（計　０　件）

〔その他〕

６．研究組織

(1)研究代表者

佐藤　亜聖（SATOU ASEI）

（財）元興寺文化財研究所　研究部　主任研究員

研究者番号:40321947

(2)研究分担者

藤澤　典彦（HUJISAWA HUMIHIKO）

大阪大谷大学　文学部　文化財学科　教授

研究者番号:80100030

岡本　広義（OKAMOTO HIROYOSI）

（財）元興寺文化財研究所　研究部　技師

研究者番号:70261211

坂本　亮太（SAKAMOTO RYOUTA）
（財）元興寺文化財研究所　研究部　研究員
研究者番号:40435904

(3)連携研究者